研究フォーラム

インド大躍進の光と影
「現代インド地域研究」プロジェクト

三尾 稔（みお みのる）
民博 研究戦略センター

持続的な経済成長を成し遂げ、世界経済の推進力にさえなりつつあるインド。
いまやその存在感は経済の枠をこえ、政治や文化の面でも高まっている。
古くから独自の文明を生み出しつつ、東西のさまざまな文明が接触し融合する
この地域において、人びとの暮らしはいかに変容しているのか。
インド大躍進の光と影の双方を総合的な観点から研究するプロジェクトが開始された。

高まるインドの存在感

この七月に終わったサッカーのワールドカップ。どの試合でもコート脇にSONYやVISAなど国際サッカー連盟の公式パートナーや公式スポンサーの広告が順番に映し出されていたことをご記憶の方もいるだろう。しかし、そのなかにインド企業が一社入っていたことは案外気づかれなかったかも知れない。この大会で公式パートナーとスポンサーになった企業はわずか一四社だったのだが、その一角をインドのIT企業が占めていたのである。

ことほどさように、国際的な会議やイベントでのインドの存在感は高まっている。G20首脳会合の参加国となっているうえ、安全保障や国連の議論の場においてもインドの発言力は重みを増している。サッカーの実力はまだまだかも知れないが、世界の西半分では人気の高いスポーツ、クリケットでは強豪国で、そのワールドカップでは来年ホスト国になる。デリーのオリンピック開催地への立候補も、真剣に検討されるに至っているようだ。

インド大躍進の意味

インドの存在感の高まりの背景には、二〇年以上持続する経済成長がある。特に九〇年代後半から実質経済成長率は年率五パーセント台で推移し、世界的に景気が後退した昨年でもプラス四パーセント台の成長を達成しており、今や世界経済の重要な推進力になりつつある。

大都市のショッピングモール。大都市の一部の景観は先進国と見まごうばかりだ（グジャラート州アーメダバード　2007年10月）

この経済発展はいわゆる経済グローバル化の流れのなかで達成されている。八〇年代末までのインドは資本も生産物も輸入を極力抑える内向的な開発戦略を続けてきた。その政策を転換して自由化を促進し、グローバルな資本・モノ・人の動きにインド社会を直接つなげたことが急速な経済発展を促す大きな要因となったことは、大方の見方が一致している。

しかし、インドの躍進はグローバル化のなかで単に欧米や日本などの先進諸国の経済発展のパターンを追随するだけの出来事なのであろうか。

長期的に見れば、インドあるいは南アジア地域は独自の文明を生み出しつつ、東西のさまざまな文明が接触し融合する領域であった。山岳地帯から、乾燥地帯、湿潤な大平原、さらには沿海地帯まで多彩な生態環境のなかで、多様な民族集団や文明が競合しながら共存の知恵をみがき、独特の人間観や世界観を生み、環境や社会条件に適合した生存様式を育んできた。インドはそれ自体が「ミニ・グローバル社会」であり続けてきたのである。

近年のインド大躍進は、ミニ・グローバル社会で育まれた知恵が現代の歴史的条件のもとで開花した結果と見ることもできる。インドを知ることは、欧米や日本などとは異なる新しい発展経路を発見したり、グローバルな世界で生ずるさまざまな社会問題を解決する鍵（かぎ）をえることにつながる可能性を秘めている。

「現代インド地域研究」プロジェクト

貧富の格差、根強い差別、環境問題などインドの抱える問題もまた巨大である。急激なグローバル化や経済発展そのものが社会にもたらすひずみが、民族的・宗教的なアイデンティティの不安などの問題にもつながっている。グローバル化した世界においては、インドが直面する問題が世界に及ぼす影響もまた大きくなる。

インドの成長の原動力を長期的な視野でとらえ、それが世界に与えるインパクトを解明する一方、躍進がもたらすひずみにも注目しながら、インドに暮らす人びとの生活や文化がどのように変わりつつあるのかを探る。インド大躍進の光と影の双方を総合的な観点から研究する必要が今ほど高まっているときはない。

人間文化研究機構の「現代インド地域研究」プロジェクトは、このような時代の要請にこたえることを目的として今年の四月から始められた。プロジェクトには、民博、京都大学、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の六つの教育研究機関が加わっている。各機関は人間文化研究機構と共同で研究拠点を設置し、各々の特色を生かした研究を進めながら、拠点間の研究ネットワークを活性化させて新しい総合的なインド理解を深めようとしている。インド、英米などとの国際的共同研究も大きな使命である。

貧困層の子どもたちへの教育もインドの大きな課題のひとつである（ニューデリーのスラムで　2009年8月）

環流する文化と宗教

民博拠点では、「環流」をキーワードに現代インドの宗教と文化の動態を解明しようとしている。環流は、もとは海流の地球規模の循環を指す用語である。インドを発信源とする宗教やファッション・映画・音楽などに代表される文化は、増大するインド系移民の活躍に合わせて世界各地に伝わり、「インド」イメージを広めている。それだけではなく、世界に流布したインド文化は各地の文化や社会と複雑な相互作用を起こし、それがまたインドに戻ってインドの文化や価値観を変えている。インドの文化や宗教は、グローバルな人や情報の動きのなかでまさに環流現象を起こしているのである。その動きの具体的なあらわれをインドや世界各地の実地調査によってとらえ、インド発の文化や宗教の環流が生み出している新しい価値観を解明することは、先進国発の現象に偏りがちだったグローバル化と地域文化の相互作用の研究に対し新しい視点を提供することにもつながるだろう。

民博拠点は、既に七月にインドの都市の変容をテーマとした国際シンポジウムを開催した。今後もさまざまなシンポジウムを企画しているが、この一二月には変貌するメディアと社会の相互作用に関する公開シンポジウムを東京外国語大学と共催する予定である。